

学習動機づけと学習行動の関連

— 達成目標理論・自己決定理論と学習の習慣化に着目して —

小 森 彩 加

近年、自己研鑽のために学習を生涯にわたって継続的に行うことが求められている。そのために自律的・適応的な動機づけを保つことが重要であると考えられる。本研究では、自律的な学びの入り口に当たる大学生を対象に、学習動機づけの様相を明らかにすることを目的とした。

はじめに、学習動機づけ理論について文献研究を行った。その結果、今日の動機づけ理論において主要とされる達成目標理論（AGT）、自己決定理論（SDT）の二理論の間に関連性が示唆された。二理論は期待×価値理論と多くの共通点を持つほか、SDTの諸概念が達成目標を規定するという理論的構造が想定された。これにより両者を包括的に捉える必要性が示された。

また、動機づけの質にかかわらず学習を継続させるための手段として、学習を習慣化することが有効だと考えられた。習慣化された行動は動機づけに左右されず、無意識的・自動的に生起するとされる。そのため、動機づけ理論と習慣の関連性についても検討した。学習が習慣化されていると、学習の取り組みもより積極的なものになると予想された。

以上の文献的検討をもとに、大学生の動機づけタイプを主要な学習動機づけ理論の統合によって特定し、各タイプの学習者がどのような学習習慣や学習行動を有するのか明らかにすることを目的とした。

大学生273名に対し、各理論に基づく動機づけ状態の測定尺度、および、学習の習慣強度を測定する尺度を用いてインターネット上で質問紙調査を実施した。

その結果、AGT・SDTの類似する概念間に相関がみられた。一般的に適応的とされる、興味関心からなる動機づけ同士と、不適応的・他者依存的な動機づけ同士が関連していた。文献研究に基づいて、SDT→AGT→学習習慣→学習行動の順に影響を与えるモデルを構築した。学習行動を従属変数として階層的重回帰分析を行ったところ、動機づけの諸変数は学習行動をある程度予測することが明らかとなった。また、上記の理論の関係性をもとに構造方程式モデリングを行ったところ、学習への欲求が学習目標に表象され、その中でも積極的・適応的な動機づけが習慣化や学習行動に正の影響を与えることが示された。さらに、弱い関連ではあるものの学習習慣は学習行動に正の影響を持つことが示唆された。

これらを踏まえて、AGTとSDTの理論的な関係性について考察した。今回はAGTとSDTの十分な理論的統合には至らなかったが、共通する部分が多いことが明らかとなったため、今後はより精緻な研究を行う必要性が示された。また、調査参加者は学習動機づけや学習活動の違いによって4つのクラスターに分類された。これを踏まえ、各クラスターの動機づけについて考察し、学習改善の介入方法についても検討した。